IntCal09Delta Graph

IntCalDeltaデータとは年輪中に残された過去の銀河宇宙線の痕跡データの変位量です。 09とは2009年発表のデータです。 下記のグラフは過去地球に降り注いだ宇宙線の変化量を表しています。 ご覧のとおり銀河宇宙線が減少から増加へ転じるときに人類文明の歴史変動が起こっております。 即ちそれは、地球気候が温暖化傾向から寒冷化傾向へ急変するときに人類史の激変が起こっている事を意味するのです。

銀河宇宙線と人類史との相関

下記グラフが右下がりのとき銀河宇宙線の変化量がマイナスであること、即ち、銀河宇宙線量が年々減少している事を表しています。
伴って太陽活動が活発化して、気候は温暖化にあったと考えられます。
下記グラフが右上がりのとき、銀河宇宙線の変化量がプラスであること、即ち、銀河宇宙線量が年々増大している事を表しています。
伴って太陽活動が停滞して、気候は寒冷化にあったと考えられます。
人類の歴史は銀河宇宙線の挙動と明らかに相関があるのです。

プラズマ宇宙論によると、銀河系を形成する銀河プラズマフィラメントの内部に位置する太陽は、銀河プラズマフィラメントと共に銀河系を周回運動しています。
銀河プラズマフィラメントが銀河中心核と電磁気力で強く結合した状態で周回運動をしている為に銀河プラズマフィラメントの内部にあって周回運動している太陽は周期的に銀河プラズマフィラメントを形作っている磁場の壁に衝突する事となるのです。 そのようにして銀河の回転曲線問題は解決されているのです。
太陽が銀河プラズマフィラメントを形成する磁場の壁に衝突するとき、磁力線を取り巻く宇宙線にまずさらされ、次第に反磁性体である太陽は磁場の壁に反抗して反磁性磁場をつくり、磁場の壁に突入して跳ね返り運動を起こします。
跳ね返り運動をしている間、太陽は無黒点、地球は小氷河期となるのです。

2009年ー2010年において、銀河宇宙線量は明確に増大に転じております。
2014年以降極大期を過ぎた太陽は次第に活動を弱め、最小期である2022年にかけてもっと顕著に銀河宇宙線量は増大することでしょう。
その結果気候変動が起こり寒冷化が顕著となります。
近未来において人類文明の激変が予想されます。

銀河宇宙線の減少傾向から増加傾向への転換

Oort Min. 1010-1050
Wolf Min. 1280-1350
Dalton Min. 1790-1820
Spörer Min. 1460-1550
Maunder Min. 1645-1715
30年戦争

広島長崎への原爆投下(1945)と核実験による14C急上昇起点

「大気圏内、宇宙空間及び水中における核兵器実験を禁止する条約」による14C上昇停止

核実験による14C値急上昇

穏定曲線

銀河宇宙線の長期的増大

銀河宇宙線の減少傾向から増加傾向への転換2009-2010年の極小期に顕在化した。

Oulu Neutron Monitor

近年の銀河宇宙線量推移と太陽磁場

太陽磁場
銀河磁場
磁場強度
磁場方向
4重極磁場
太陽磁場反転
4重極

一時的な銀河磁場増大による太陽磁場撹乱による影響
銀河磁場増大による撹乱？
主に太陽活動増大による変動
主に太陽活動増大による変動
主に太陽活動増大による変動
太陽活動減衰と宇宙線量増大による変動
太陽活動減衰と宇宙線量増大による変動
宇宙線量増大による変動
宇宙線量増大による変動
太陽活動減衰と宇宙線量増大による変動
銀河磁場増大による影響？
1958-1974 サベル太単極大磁場
1958-1972 イラン双極大磁場
1985-1991 ソ連単極大磁場
1991-1992 ソ連単極大磁場
1992-1993 ソ連単極大磁場
1993-1994 ソ連単極大磁場
1994-1995 ソ連単極大磁場
1995-1996 ソ連単極大磁場
1996-1997 ソ連単極大磁場
1997-1998 ソ連単極大磁場
1998-1999 ソ連単極大磁場
1999-2000 ソ連単極大磁場
2000-2001 ソ連単極大磁場
2001-2002 ソ連単極大磁場
2002-2003 ソ連単極大磁場
2003-2004 ソ連単極大磁場
2004-2005 ソ連単極大磁場
2005-2006 ソ連単極大磁場
2006-2007 ソ連単極大磁場
2007-2008 ソ連単極大磁場
2008-2009 ソ連単極大磁場
2009-2010 ソ連単極大磁場
2010-2011 ソ連単極大磁場
2011-2012 ソ連単極大磁場
2012-2013 ソ連単極大磁場
2013-2014 ソ連単極大磁場
2014-2015 ソ連単極大磁場
2015-2016 ソ連単極大磁場
2016-2017 ソ連単極大磁場
2017-2018 ソ連単極大磁場
2018-2019 ソ連単極大磁場
2019-2020 ソ連単極大磁場
2020-2021 ソ連単極大磁場
2021-2022 ソ連単極大磁場
2022-2023 ソ連単極大磁場
2023-2024 ソ連単極大磁場

銀河磁場による磁力線が太陽系内に侵入する時、太陽の磁場生成機構に作用してフレアの爆発を起こさせ、CMEを発生させると考えられます。
CMEが地球を直撃するとき、CMEによる強い電磁気的パルスは地球地殻コンデンサーを電磁気的に破壊して巨大地震や火山の噴火を誘発すると考えられます。
また、銀河磁場による磁力線が太陽系内に侵入して地球近傍を通過する場合、磁力線にまとわりついた荷電粒子宇宙線が地球に直接降下すると考えられ、その時、オーロラ電流によるジュール熱の発生を増大させて極地や海洋の温暖化を引き起こしたり、また、地球大気層の熱圏を吹き飛ばし熱圏の遮蔽効果を減少させて異常気象を引き起こすと考えられます。

宇宙線量増大による変動
宇宙線量推移予想曲線
グラフの目盛りからはみ出る程の銀河宇宙線量となる可能性があります。

上記グラフや年表や解説の意味するところの本質とは、現在の方法論である要素還元主義一辺倒では、70億人にまで人口爆発してしまった人類社会が小氷河期襲来によって存続できるのかに疑問を呈している事なのです。 即ち、現在の学問体系にしろ、社会システムにしろ、一見合理的な要素還元主義によって成り立っておりますが、小氷河期襲来と言う未曾有な状況に対して有効に対処できるとは到底考えられないのであります。 何故ならば、要素還元主義においては全体を掌握する何者も存在していないからなのです。 全体を掌握しようとする努力を欠いたが故に、人類文明社会はこれから未曾有の試練を迎えざるを得ないのです。 多くの諸君は上記グラフや年表や解説の意味するところを理解しようとはせず、これはオカルトの一種であるとしか認識しようとしません。 その事を俯瞰してみれば、結局、多くの諸君とは小氷河期襲来において右往左往しながら命を落としていった過去の人類となんら変わらないのです。(合掌)

Asserted by Birkeland Ⅱ 2014/01/08